

## その本性に立ちかえれ

人生、それは実に迷いに充ちた世界ではある。一切衆生は、重い荷物を背負い、泣きつつ、苦しみつつ、暗い道をたどってゆく。人間は誰も彼も素直に生きてゆきたいのだ。けれどもこの重い荷物が、人生の冷たさが、いつしかにその本当の自己の相を失わしめて、遙かなる他郷たびに輪廻せしめるのである、永い暗い旅路を輪廻していると、ますますその本性を失い、真実の歓びから逃げ、家を失った犬のように、少しの落ちつきもなく、幻のような予想を追いつつ、過去を悔い、人を恨み、ただ焦燥と自暴自棄と、そうした嫌な心に自ら苦しみつつも、ますますその本性を失い、深い暗に沈んでゆくのである。かくして六道輪廻の暗の中に埋れると、ついには輪廻していることすら忘れて、これを本当の相とあやまり、旅路を家郷とさえまちがえてくる。

だがこうした迷路に迷える子は、光明の世界につれ返されねばならない。大聖、聖人、そうした方は皆、その大慈悲によつて、私をこの暗い旅路よりつれかえり、旅より家郷に、生死より浄土に、輪廻より悟証さとへ、暗より光へ、虚偽より真実へ、狂態より本性へとつれ返つて下さるのである。

浄土へ往生するとは、まことにこうした一道へと立たして頂くことである。

衆生の迷いは深い。迷いを迷いと知らぬほど深い。そして迷路より帰りたいとの願いすら失っている。よし迷いや苦しみがわかつて、どうすればいいのかさへ知らない。そこに大聖聖者の涙がある。その涙がお念仏を通して私の上にはわからして頂く。真実教はいつも涙にぬれている。三毒煩惱とは種類の永遠に違つた涙である。

「合掌南無阿弥陀仏

先生有難うございました。前後十日間に互むたる尊き法苑の座に侍らせて頂きました身の仕合せを限りなく感謝いたします。ああ人間に生れてよかつた。そして先生に会つてよかつた。もし先生にこの地上で会えなかつたら、私はどうなっていることでしょうか。福山講習会記事での亀谷様の『先生さみしいでしょうね』のお言葉こそ、私が先生に申し上げねばならぬ言葉なのでございます。先生の御化導を受けること五ヶ年、それに今日までの私の足どりは一体どうなっているのでしょうか。先生お寂しうございましょう。古来より何れの先駆者の御一生もさびしさに終始せられていたことと存じます。『里はまだ夜暗し富士の朝日かげ。』江川坦庵の句でございましたかしら、今宵独り静かに居りますと、何故かしら先生の苦闘と寂寥そのものであったであろう四十年の御一生が考えられて、涙ぐまれて仕方がございませぬ。その涙に綴られた先生の過去の全体こそ、目覚めぬ私一人の為であったとは、師主知識の恩徳は……報恩どころか今日まで師の心臓をえぐりたいだけえぐりぬいて来た私でございます。その罪万死に価するとは私のことでございます。……」

あまり泣いたことのないあなたが、泣いた日の後に書いたものでした。あなたの如来があなたを救つた有難い手紙です。

仏陀がお弟子をつれて歩んでいられると二人の酔漢があらわれた。一人は仏陀を見るや、走つて叢の中にかくれた。一人は大道の真ん中に胡坐をかいて、くだらないことを口走つている。最後の一人は、立ち上つて大音声で「俺は何も酒を盗んで飲んだのではない。逃げたり隠れたりすることがいるか」と叫喚いて狂態を表わした。

仏陀は阿難尊者を顧みて言われた。「先に逃げて叢の中に隠れた男は、罪を自覚して、我を見るや慚愧し恐れをなした。彼は当来、弥勒仏の時、因縁熟して悟を開くであろう。次の男は、未来千仏にお会いして始めて悟を開くであろう。最後の男は到底成仏の縁は無いであろう。」と教えられた。

仏陀の御まなこは違ふ。迷える者にそそがれる仏陀の慈眼は。

唯の凡夫、その凡夫でさえ、南無阿彌陀仏を通して、我を、人を、世の中を見れば今までとは違ふ。

女房が仏法を聞くとて、怒つて打ちたたいた男も、それが決してその男の本性ではない。

男がすることに嫉妬の眼のみをそそぎ、一家を暗黒にしている女の相も、それが決してその本性ではない。荒くれ男がドスをぬいて斬りあつていても、それが彼等の本性ではない。

たとえ私が念仏していることを罵倒し攻撃し迫害して私の腕をもぎとる人がいようとも、それが決して彼の本性ではない。

そうした相のどこにも、ほんとうの歡びや明るさははないではないか。しかるに彼等2は依然として、真の歡びと明るさを求めている。

衆生は、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒煩惱のみをもつものではある。しかし貪欲、瞋恚、愚痴を好むものでもなく、満足するものではない。南無阿彌陀仏は、この三毒煩惱にあらざる清淨眞実の紅き大心力にたまします。「衆生貪瞋煩惱中、能く清淨の願往生心を生ず」この清淨なる願往生心こそ、如来心そのものを廻向されて、貪瞋二河の唯中におこす信心である。信心の世界においてのみ、満され救われるのは、信心の世界においてのみ、一切が生かされるからである。純粹なる眞実に通う純な心だからである。

遙かなる苦惱の他郷に、眞実の故郷よりさしのべられた大悲のみ手こそ、如来の本願である。

「無量無辺阿僧祇劫に涅槃に入らず、是の故に、我阿闍世の為に無量億劫に涅槃に入らずと言えり。」阿闍世とは唯に王舎城の王のことのみでなく「阿闍世とは、普く一切五逆を造る者に及ぶなり。」阿闍世とは即ち是れ煩惱等を具足せる者なり。」で、即ち阿闍世とは私のことであり、迷える一切衆生のことである。涅槃の樂を後に、迷える衆生を御自身の大悲の内容として觀じ、生死界に降り立ちたもう親の御相こそ法蔵菩薩である。

菩薩の本願こそ、如来と衆生とを同一運命、一如一体に觀じたまい、自利利他一如に救わんと大悲のすべてである。この大悲本願の全体こそ、直ちに衆生の本性とな

り、生命となり、衆生を迷路より覚まし、願往生心となつて、その家郷本国へ還帰せしめたものである。

大悲本願に救われて、衆生は迷いを迷いと知り、煩惱を煩惱と知り、その自覚を通して、如来のみ真実にてましますことを信じ、その招喚の勅命のままに一道を歩むのである。如来は彼岸に立つて現実生死流転にある我を招喚したもう。その招喚の勅命、我に徹する時、我等は我等のすべてを知る。

人間は何のために生きるのか。それは人間に与えられた課題であつた。「大法を聞くために」「念仏するため」のみあるべき一生である。そのことがただの話でなく、口先だけでなく、身をもつて知らされた時、その人の荷物はとても軽くなるであろう。この世の過ぎ方は、ただ念仏求道中心に営まして頂くべきである。欲中心の生活は軽く見えて重く、楽しく見えて苦しく、有意義に見えて無意義である。

女が男の風で歩いてはおちつけない。男が女の様子でも落ちつけない。愚者が賢者のように気取つても、悪人が善人であるかのように考えても、すべて落ちつけるものではない。二十歳のものは二十歳に、五十歳のものは五十歳に、愚者は愚者に、悪人は悪人に、それぞれ自分のほんとうの相にかへつた時、そこにはみ仏が手を受けて待つていて下さる。

如来の智慧光は衆生のありのままを照破して、その本当の価値と高上りした思いとの開きを打壊して、私を私にまでつれかえして下さる。その時ほんとうに大悲の中で落ちつけるのである。

私の本性は三毒の煩惱であり、清き心性を失える者であるにかかわらず、念仏の世界においては如来心そのものである。「南無」の二文字は私のものとなり、私の本性の如くなりきつて下さつて、失われた清き心性を与えたもうのである。南無は信心であり仏性である。

世間でよく、懺悔して生れかわつた人のことを、彼は本心に立ち返つたと言う。この意味でならば救われるとは、本心本性に立ち返ることである。如来はまことに本心に立ち返して下さるのである。本心に立ち返つた時、必ずそこには親がある。涙にぬれる親がある。慚愧は子心のすべてである。しかもその懺悔すら親心からにじみ出たものである。慚愧、懺悔は、親心によつて、親心に立ち返つた子心である。五体を大地に投げ出して合掌した時、子供の肩には微塵も荷物は負わされてはいない。荷物の重い日、無意味に感ぜられる灰色な日、必ずみ親を忘れた日である。泣くべからざるに泣いている日、大悲の涙にふれると、何を歡ぶべきか、何を悲しむべきかを知らせて下さる。念仏すべきである。念仏はその本性に立ち返つて、歡喜と懺悔に生きる者のすべてである。